

『刻印』

永川 とも子

長崎市坂本町は、原爆落下中心地である松山公園から少し歩いた場所に位置する。この地に現存する山王神社には、かつて四つ鳥居が立っていたという。そのうち二本は原子爆弾の被害を受けて全壊、一本は無傷、そして残りの一つは片足の柱が吹き飛んだ状態となった。これが後に「片足鳥居」と呼ばれる、長崎市では数少ない現存する被爆建造物となる。

この「片足鳥居」には、知られざるエピソードがある。まだ片足を失っていない頃の話である。正確な年代は定かではないが、おそらくは昭和初期から一九三〇年終盤までの間と思われる時期、浦上一帯に居住する人々がこの鳥居の建立にあたって少しずつ費用を出し合った。人々、というのは大半が女性であった。おそらくは各世帯の妻達が集まって形成される「婦人会」の構成員の人たちであったのだろう。鳥居はこれらの人々の寄進によって建てられたのである。そして鳥居建立の感謝の意を込めて、浦上の地に住む彼女たち寄進者の名前が、鳥居の両方の足に刻印された。こうした女性たちは多数いたものと思われ、それぞれの名前はとも小さな文字で彫られたという。それにしても、寄進者の大多数が女性であった、という事実は戦時中に彼女達が直面していたある運命を想像させるものである。すなわち、男達

のほとんどは兵役に就いていたのではあるまいか。夫達がいつか帰ってくるのを待ちながら、妻達は肩を寄せ合って暮らしていたのではあるまいか。そんなことを考える。今、私の手元にある古い写真は、戦前の浦上地区で撮影されたもので、この想像を確固たるものにする。三度笠のような防空用の被り物を被り、地味な着物を着た二〇〇四〇代と思しき女性達が、前方に八人、後方に七人整列し、こちらを見ている。彼女達の顔には生気がなく、長引く戦争に疲労しているようにも思える。不穏な時代に子を抱え、女ばかりで生きなければならぬことへの不安が伝わってくるようである。

原子爆弾は、正に彼女達の上に投下された。かくして鳥居と女性達は運命を共にすることとなる。ただ両者の辿った運命は二手に分かれた。一方は片方の足を失いながらも戦後を長く生き延びることとなった。そしてもう一方は、その他大勢の死者の中の一人名となった。歴史に埋没することとなった。彼女達がかつて浦上で様々なことを考えながら、人間らしい生活を営み、確かにこの世に存在していたことを証明できるのは、親族の記憶の中と、鳥居の柱に刻まれた刻印のみである。

私がこの話を知ったのには理由がある。鳥居の寄進者である浦上の女性の中に、曾祖母にあたる人物がいるという話を、最近になって母から伝え聞いたのであった。母は、「大塚ノブ」という名前が刻まれた柱を探しに、山王神社を訪ねたが、どれだけ探しても見つからなかったという。鳥居に刻まれた文字は長い年月を経た色あせ、判別しづらくなっていたのである。七〇年の歳月はかくして、一人の死者の存在証明を他者の記憶のみに託すこと

となつたのである。

「原爆文学」を研究する上で、最近感じていることがある。それは論文がどんな切り口であるにせよ、歴史に埋没していった一人の死者のことを意識し、その他大勢の人々の中から浮き彫りにすることの必要性である。犠牲者を個体から編成された「集合体」として見るのではなく、さながらアメリカ人ジャーナリストのジ

ョン・ハーシーが著した『ヒロシマ』のように、名もなき人々を一人の思想を持った人間として光を照らすことで、原爆という出来事を異なるパノラマからとらえることができるのではないだろうか。鳥居の刻印が放つ強烈な印象は、こうした名もなき市民の一人であつただろう曾祖母からの訴えではないか、とも思えてくる。